幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方についての実践的研究
——保育記録の整理と活用に着目して——

目次

I テーマ設定の理由 …………………………………………………………………………… 11

II 研究の仮説 ……………………………………………………………………………………… 11

III 研究全体構想図 …………………………………………………………………………………… 12

IV 研究の内容 ……………………………………………………………………………………… 12

1 幼児一人一人の発達に応じる生活 …………………………………………………………… 12

2 一人一人に応じる発達理解 ……………………………………………………………………… 13

(1) 0歳から入園までの先行発達 …………………………………………………………… 13

(2) 幼児の発達の特性 …………………………………………………………………………. 13

3 一人一人の発達に応じる援助のために ……………………………………………………… 13

(1) 発達観 ……………………………………………………………………………………… 13

(2) 発達を促す ………………………………………………………………………………… 13

(3) 発達の視点としての領域 ………………………………………………………………… 14

(4) 発達の道筋 ………………………………………………………………………………… 14

(5) 援助におたっての基本的な姿勢 ………………………………………………………… 15

(6) 保育の展開と援助 ……………………………………………………………………… 15

4 保育記録の整理と活用 ……………………………………………………………………… 15

V 事例を通して発達と援助を考える …………………………………………………………… 16

1 幼児の思いに添う …………………………………………………………………………… 16

2 発達の課題を考える ………………………………………………………………………… 16

3 発達の道筋と援助 …………………………………………………………………………… 17

VI 研究の成果と今後の課題 …………………………………………………………………… 20

1 成果 ………………………………………………………………………………………… 20

2 今後の課題 ………………………………………………………………………………… 20
＜幼稚園教育＞
幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方についての実践的研究
——保育記録の整理と活用に着目して——

余満市立兼城幼稚園教頭 又 吉 ノリ子

Ⅰ テーマ設定の理由
近年、生活の画一化、規格化が進み、一人一人の幼児を個性豊かに育てることの難しさがいわれるようになってきた。また、幼児の成長、発達は「できること」と「急さ」が判断基準であるかのように受け取られている。そのことから、子供たちはある地点に早くたどりつくことを求められ、自分らしく考えたり、試したりしながら成長する余裕を奪われてはいないだろうか。

そうした中、平成元年幼稚園教育要領が改定され、「一人一人のようやく」「その子らしさ」を大切にした保育理念が示された。幼稚園教育指導書においても「一人一人の幼児の発達の特性やその幼児らしい行動の仕方や考え方などを理解して、それぞれの特性や課題に応じた指導を行うことを重視しなければならない」とある。幼稚園教育の主軸は「一人一人の発達の姿」であり、「その子らしさ」を発揮しつつ育って行く過程を大切にし、望ましい方向に発達を促するという幼児期にふさわしい教育の実現がなされなければならない。

実際に幼稚園では、一人一人の発達に応じた保育を目指し、次のような保育実践を行っている。たとえば、長絵を取入れた生活では、先行経験からずく跳び始め子に対しては、保育者も一緒に跳べることの楽しさを共有している。綿に初めて出会う子に対しては、綿にかわる様子を見守り、走り回ったり、友達の跳ぶのをじっと見ている様子に寄り添いながら、遊びに広がりや深まりを期待している。そうした生活を共にしていると、一つのことが身につくには、その過程において、時期や身につき方もそれぞれであることがわかる。保育者が幼児一人一人の発達の個人差を受け止め、適切な援助をすることで自ら伸びようとする力を助長することができるのではないか。

一方、そうした日々の保育を振り返ってみると、
① 興味や関心に基づき、主体的にかかわっているのだからと「手をこまねいたり」「ただ見守ったり」幼児を主体にすることを意識し過ぎて、援助の程度がつかめない。
② 保育者が全面に出過ぎ、遊びが盛り上がりされることに満足していないか。
③ 発達に必要な経験は、興味・関心に支えられた経験だけでなく。

など、幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方について考えさせられることが多い。
このことは、幼児の発達をどのように理解し、具体的にどのようにかかわるかということの理解が不十分であることに起因する。しかし、幼児の発達はいくつもの側面が複雑に絡み合い、捉えることは容易ではない。また、より良い保育を行うために、保育の記録を積み重ねているが、次の指導に生かされるような発達を捉えているとはいえない。
そこで、これらの反省の上に立ち、幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方のためには、幼児と生活を共にするありのままの記録の中に実践的に幼児の発達を理解し、援助のあり方を明らかにすることであると考えている。そうすることが幼児一人一人の望ましい発達を助長し、充実した園生活になものと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究の仮説
1 幼児の生活をまるごと受け止め、幼児と共に創り出す生活で、幼児の発達の実情と課題に即した援助を行えば、幼児一人一人の発達が促され、充実した園生活が送れるであろう。
2 保育の記録を通して、行為の意味をていねいに読み取れば、幼児理解と次の保育の計画を創り出す手掛かりになり、幼児一人一人の発達に応じる援助ができるであろう。
Ⅲ 研究全体構想図

幼稚園教育の目標
1. 健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て健全な心身の基礎を培う
2. 人への愛情や信頼感を育て、自由と協同の態度及び徳性の芽生えを育む
3. 自然の美しさや象徴に対する興奮や関心を育て、それらに対する豊かな感情や思考力の芽生えを育む
4. 日常生活のなかで言葉に対する興味や関心を育て、喜んで話したり聞ったりする態度や言葉に対する感情を育む
5. 多様な体験を通じて豊かな感情を育て創造性を発揮する

幼稚園教育の基本
※ 環境を通じた教育
1. 主体的活動を促し、不思議な生活の展開
2. 遊びを通じた総合的な指導
3. 一人一人の発達の特性に応じた教育

生活的教育目標
しょうふな子 やさしい子 かんがえる子 ねばり強く頑張る子

幼・家の連携
生活を支える生活の在り方 環境 共に支え合う生活

研究テーマ
幼児一人一人の発達に応じる生活の在り方についての実践的研究 — 保育記録の整理と活用に着目して —

研究の仮説
1. 幼児一人一人の発達に応じる生活を育て、幼児と親が協力して、幼児の発達の実情と課題に即した援助を行えば幼児一人一人の発達が促され充実した園生活が送れるであろう。
2. 保育記録を通して、幼児の発達をいつでも観察し、幼児理解と基盤を送る手掛かりになり、発達に応じた援助ができるであろう。

研究への具体的なアプローチ

幼児一人一人の発達に応じる生活とは
1. 一人一人に応じる発達理解
   - 先行発達・幼児の発達の特性
2. 一人一人に応じる援助のために
   - 発達観・発達を促す・視点としての領域
   - 発達の道筋・援助にあたっての基本的姿勢
   - 保育の展開と援助
3. 保育記録の整理と活用

文献
1. 記録の工夫
2. 発達記録の分析
（実践的援助の在り方を探る）
3. 具体的な援助

Ⅳ 研究の内容
1. 幼児一人一人の発達に応じる生活とは

幼稚園教育を行なう上で特に留意したいことは、幼児の「今」の姿をあらゆる方々に捉えるということである。幼児期は絶えず発達する。この絶えの連続が一人一人の発達の個人差を大きくしている。入園までの生活のなかで、どのような経験を積んで来たかによって園生活への入り方、友達とのかかわり方、興味関心等、一人一人に養われる幼児一人一人の発達のためには、この経験からくる個人差の大きなものに対して十分に理解することと共に、発達のテンポや方向にも個人差があるということが重要である。また、そのことは自己と幼児一人一人の望ましい発達に必要な教養もそれぞれ異なるとする観点に立ち、幼児と共に充実した園生活を送って行くことであると考える。

— 12 —
2 一人一人に応じる発達理解

(1) 0歳から入園までの先行発達

① 0歳から1歳半まで

母親との関係によって「信頼感」が獲得される。幼児は、この信頼感を抱く母親を外界の絆として安定し、外界を安心して受け入れることができるようになる。

② 1歳半から3歳頃まで

幼児はこの時期に、離乳、歩行、言語の使用、排泄習慣が身についてくる。このことが自分のこととは「自分でするんだ」という自立感を獲得して行くことになる。なお、自立感は信頼感を基礎にして、その獲得がスムーズに行われる。

（離乳）離乳によって授乳者への全面的な依存から解放されるきっかけが得られるということは、幼児にとって重要な意味を持っている。しかし、授乳を媒介とした温かい感情交流のない離乳は、母親への信頼感が阻害され、母親に依存しないような生き方をするようになり、社会化が妨げられる。

（歩行）歩行は幼児の外界への行動範囲を拡大して行くだけでなく、自分を他との関係において自覚させていく契機になる。

（言語の使用）言葉を発するようになると、幼児は自分の要求や感情を相手に伝え、自分の行動を促したり、抑制したりすることができるようになる。

（排泄習慣の獲得）排泄の習慣が身につくということは、幼児が自分の体を管理することができるように始めるという意味を持つ。それが身につくと、自分の能力への信頼が持て、自発的行動するようになり、社会性発達の素地が築かれる。

③ 3歳～4歳

3歳から就学前までは積極性的獲得が行われる時期である。3歳半になると、思う存分体を動かし、次々と新しいことをやりたがるようになり、自分以外の他児と共有する世界で遊び始める。自我に目覚め、自己主張をしたり自分の思いを伸び伸びと表現する。自分一人ではない外界の刺激を感じ取りながら様々な側面が急速に発達する。

(2) 幼児期の発達の特性

① 身体が著しく発育すると共に、運動機能が急速に発達する。

② 大人への依存を基盤としつつ、自立へ向かう時期である。

③ 生活体験から得た自分なりのイメージを基に物事を受け止めていく。

④ 信頼やあこがれをもっているものの模倣をしたり、取り入れたり、同一化の時期である。

3 一人一人の発達に応じる援助のために

(1) 発達観

① 発達とは、幼児が能動性を発揮して環境とかかわりあう中で、必要な能力や態度を生活の中で獲得して行く過程である。

② 幼児は周囲の環境に自分から能動的に働きかけるようとする力を持っている。

③ 幼児期は、能動性を十分に発揮することによって、発達に必要な経験を自ら獲得して行くことが大切である。

④ 幼児は、「育てられる」存在ではなく、幼児同士で、またかかわりあう大人と相互に「育ち合って行く」存在である。

⑤ 発達を理解するときは、その子の変化だけでなく、新たな状況や相手の状況を考えて、その子の余裕を判断することが大切である。

(2) 発達を通す

発達を通すには、日々の生活を充実させることが基本となる。そのためには、保育者との信頼関係を基盤に能動性を十分に発揮できるようにすること、そして、発達に応じた環境からの刺激が重要である。

幼児の環境とのかかわり合いによる発達は下図の通りであると捉えることができる。
(3) 発達の視点としての領域
幼児の発達を呪縛の窓口として5つの領域がある。すなわち「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」である。領域に示されているねらい、内容は幼児が幼稚園修了までに保育者が指導し、幼児が身につけることが望ましいとされるように、幼児期の発達に必要な経験と言える。発達は、まるごとの人間発達であり相互に絡合しながら促される。
また、発達は結果をみることではなく、そこに至る過程を知ることであり、どの窓口からみても＜幼児の全体像＞をみることになる。
5つの領域は、ねらいや内容を加味し、右図のように8つの視点に分けることができる。

（4）発達の道筋
発達という場合にはすぐに頭に浮かぶのが発達段階である。「4歳児だから……」「5歳児だから……」という年齢で区分された発達段階である。しかし、それは発達をみる一つの目安にはなるが、その基となるプロセスが見失われるところがあれば、かえって弊害が生じる。発達は一人一人が自分なりの道筋を固めて行くところにある。そのために、次のことを理解したい。
① 幼児の発達は、一画一的ではなくいくつかの道筋がある。
② 発達の側面は、停滞したり、急激に伸びたり、一つの側面が伸びることによって他の側面が促されたりする。
③ 発達する姿は、長い期間としてみると共通性や順序性が見られるが、短い期間で見るいろいろな道筋を歩んでいる。

図1 発達が促されて行く過程
図2 発達に応ずる環境
図3 領域と発達の関係
図4 領域の8視点
発達の道筋には節目がある。停滞したり、低迷したりしているように見えるときである。しかし、こうした時期は、その子なりに貯め込んでているものがあり、その時期を乗り越えると急激に発達することもある。

(5) 担当にあたっての基本的な姿勢
① 子どもへの信頼…………幼児は信頼され任されると真剣に生活し、けながいも自立しようと力を出し切るものである。
② 温かいかかわり…………安心して自分の気持ちが発揮できるためには、温かく受け入れられることである。
③ 生きる力の基礎作り　・何かできたかではなく、どう学んだかを大切にする。
　　　　　・見たらマイナスに見えることも、その幼児にとっては意味あることとして価値づけ、違いないかわかる。
　　　　　・自分の意志でやり遂げる喜び、自ら学ぶ喜び、仲間に知恵を出し合う喜び、よい生活をする喜びを体験を通して学ばせる。
④ 一人一人の尊重…………一人一人の違いを認め、持ち味を生かし、その時期を失わない。
⑤ 場の確保　…………一人一人の違いに応じるためには「たっぷりの時間」「思いっきり活動できる空間」「共感し、共に生活を創る仲間や保育者」が必要である。

(6) 保育の展開と援助
① その時期に環境とかかわって求めてくると思われるものを予想する。
② 幼児がしたいに自分たちで生かし展開できるような方向に援助する。
③ 保育者自身のかかわり方や動き方をあらかじめ考えておく。
④ 一人一人の発達に応じ、かかわり方を変える。
⑤ 信頼関係を基にかかわれるよう、十分にコミュニケーションする。
⑥ 援助のあり方の方向性は、時期や個々の状態により、柔軟に判断する。

4 保育記録の整理と活用
一人一人の幼児の発達に応じた生活を営むためには、幼児を理解することが最も大切である。幼児の生活する姿を捉え、今、何が育つとしているのか、またそれをどの方向へ伸ばしていきたいかという保育者の願い（ねらい）を一人一人の幼児に対してこそ、その子にあった援助が生まれる。そのために記録を取ることは重要である。理解しようと取り続けることが、結果的に幼児理解を深めることになる。何のために記録するのか、絶えず必要感を明確に捉えて、実態に即しながら記録することが大切である。

(1) 記録の工夫
①あらかじめ記録の視点に合うような、様式を準備して書き込みやすいようにする。
②記録の視点
〈幼児の遊びについて〉
・遊びの何に興味・関心があるのか。
・この遊びで経験していることは何か。

どんなことに関わるか（遊びの充実・友達関係）
〈環境構成について〉
・どのように取り組んだか。・再構成をなぜしたか。その結果はどうか。
〈保育者の援助について〉
・なぜこのような援助をしたか。
・援助した上で幼児はどのような姿をみせたか。

図5　幼児を理解する過程

<table>
<thead>
<tr>
<th>日々の保育</th>
<th>日々の記録</th>
<th>記録の読み上げ</th>
<th>保育カリキュラム</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>幼児の興味の</td>
<td>エピソードを記録する</td>
<td>持ち味やよさを捉える</td>
<td>多くの目で観る</td>
</tr>
<tr>
<td>対象、程度、方法等</td>
<td>仮ち遊びへの</td>
<td>経過や変化を捉える</td>
<td>新たな目で観る</td>
</tr>
<tr>
<td>瞄点を持つめる</td>
<td>関わり方</td>
<td>他との関わりを観る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>表情や動き、言葉を</td>
<td>状況や保育者と</td>
<td>行動の意味づけ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>丁寧に捉える</td>
<td>関連づけて捉える</td>
<td>状況を捉える</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>共感的にみる</td>
<td>保育者の見方や</td>
<td>状況を捉える</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>願いをもって記録する</td>
<td>保育者自身の読み取り</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(省察) 意識化 (解釈) (検討) 明確化 (修正)
(2) 記録から何を読み取るか

記録から何を読み取るかが保育を改善するうえで重要な意味を持つ。記録の中で次のことを読み取ることにより良い保育を生み出されることになる。
① 一人一人的の幼児の生活の変化を読み取る。
② 幼児の姿を生み出した状況を捉える。
③ 保育者自身を読み取る。

Ⅴ 事例を通して発達と援助を考える。

1 幼児の思いに添う

【事例　１】ぼく行くところがないのに………（5歳児 12月）

寒い日が続く内。砂場でT男、N男、Y男が遊んでいる。しかし、洋服が薄れて寒そうである。片付けの際、「寒かったんじゃないの？」と声をかけた。T男が弱々しく「だってぼく行くところがないのに………」と答える。

午後になって、砂場にいられないのでT男たちの気持ちを保育者が理解しようと話し合い、そのことは決して即T男を他の店に入れてあげることではないことを確認する。

担当のM先生がT男と遊ぶことになった。M先生も寒い中、足元になっての砂遊びである。M先生のアイデアも加わり、海を作るために穴を掘り、黒いビニールを敷き、水が溜まるように……と、一生懸命である。できあがったときには、「先生、舟浮かべよう」と近くにあったボートの葉を浮かべたり、「海遊船だよ」と喜んだ。明日も遊べるようにと、船になるボートの葉をていねいに片付けたり、ビニール袋を干している。「砂場楽しもうだっただね」と声を掛けると、「うん明日も遊びだよ。N男たちと約束した。先生も遊びたい？店のお客さんがいないときに来てね。僕たちも後で行くよ」と誇らしげに話す。

事例を通して学ぶために次の手順を踏んだ。
a） 幼児の生活をどう受け止めか
b） 受け止めたことともとに、どう援助したか
c） 援助したことで幼児の生活はどう変わったか
d） a、b、cをもとに、T男を支える援助のあり方を考える。

T男にとっては、「僕行くところがないのに………」と砂場にいられないので時と、「明日も遊ぶんだよ」と誇らしげに語るときもでは、明らかに育つものが違うと考えられる。前者は不安、不満、葛藤であり、後者は満足、充実である。一見自由に遊んでいるように見える幼児の遊びに不自由を感じ取り、幼児の思いに添うことによって、幼児自身が実体験した遊びを切り開いている。保育者の具体的な援助は、T男の言葉からその奥にある意味に気づき応えることである。

2 発達の課題を考える

【事例　２】連なり連なる （5歳児 6月O日 雨）

雨が降り、4人の男の子が階段を駆け上がり、廊下を走り回る。連なっているかどうかを常に確認しながら、振り向いては笑い、目を合わせては大声で笑う。いつの間にか仲間が増え、高いところや、テーブルの上を歩きサリンになって、突然H子が大きな声で泣いた。「M先生が悪いんだ。K男たち怒らないからだよ。うるさいから。みんなだって外で遊べないけど我慢しているんだから……」という。

園生活にもようやく慣れてきたこの時期は、友達がつながり始めるときでもある。雨が降って外に出られないという環境が友達の動きにより興味を持たせたのだろう。遊びの先頭にいるR男と同じことを言うというつながりの中で楽しんでいる。他愛のない走り回る遊びであるからこそ、一緒であることがある。
確かめやすい。暗黙のうちに心を合わせ、笑い、徐々に仲間が増えるこの遊びは「友達になりたい」幼児の思いをひとつにしてくれた。

しかし、一方で子供が大声で泣く。そして初めてR男たちは「自分の楽しみが人の迷惑になっている」ことを知らされる。雨という雰囲気、遊びたいという思い、他の子の迷惑といういろいろな状況に直面し、R男たちは葛藤する。援助の工夫はこの状況を判断することである。

こんな幼児の姿に注目して

1. 熱中して何度も取り組み、納得のいくまで遊んでいる
2. 他の子がやっていることをそばでしつとみると
3. 自分の気持ちや発見を周りの子や保育者に伝える
4. 今まで取り組まなかったことを、その子なりに自分から挑戦しようとしている
5. 何かうまくいかなくて落ち込んでいる

成長の根っこです

どうして？それから？必要な物は？すごいね！

こんなアイデアもあるよ

図6 発達の課題を捉える

3 発達の道筋と援助

【事例 3】T男の事例にまなぶ

4月

一旦部屋に入った後はほとんどの雑用である。
他の子の間を少し触れるように走る。
高い欄の上を軽く身をこわして歩いている。
かわる友達が一人いる。決まって障壁間際になると「D男か？」「と求めめる。

5月

4月の状態に加えて、幼稚園外に出るようになった。
最初のおうちは、こっそり出していたが、先生たちが一生懸命探しているのがわかると、今度は先生を十分に引き付けてから園外に出て行く。
車を確認しないで出て行くので危険である。看板を車道に出し、運転者に注意をお願いするが、看板は必ずどこかに隠してしまう。ただ面白がる。

6月

朝、一日歩きたいても、他の子の部屋に入るところになる。
と決まって家での事に気をそそいでいる。
他の子送迎も水遊びが始まったが、ほとんどかわらず一人である。
カバンに着替えが入っており、帰る間際には表情と共に消える。

着替えられた後、絵本の部屋で絵本を食べていることがある。

7月

帰りの友達が増えた。D男に加え、A子、Y子、K子である。どちらかとしてもべえ合いである。障壁が、一緒に遊んでいるようである。家庭から「まだ帰っていませんか……？'
と問い合わせられる。

8月（夏休み）

絵本の貸し出しに一緒に暮らしているおじさんと来る。
「絵本を借りに行くことを楽しみにしているんですよ」とのこと。

9月

日によっては「おはようございます」とびっくりするような元気な声であることをし、登園する。

朝は何を食べ、必ず台所で食べる。

運動会に向けて、遊む子が増えた。
T男も遊んで走り回るが、バトンをしっかりと受け取ります。

全ての子から「先生……T男よりうー」と言われる。
そのことが面白くないらしい。

会話を増えてきた。エイサーは無心に話す。

10月

ドッチボールなどルールのある遊びが始まる。
T男はやる気は十分にあるが、ルールの理解ができない仲間になれない事が多い。

11月

部屋で遊ぶが、友達に作ってもらった車を持って「プーパー」と走り回る。

なるativeになり、黙しを守って紙を切たり、支ったり、その場に長くこたえる。

12月

うんざりしている様になった。

S子などが誰かためにも「T男すこぶるだ」と連連している。

そのことがあってか、あえぎあえぎと戦うようになる。

みんなと共通の遊びの中で有る実感が全然からにあふれている。

応援「教えろ」「と反応してくる。

お店はどこで、「ゲームセンターのおじさん」になり一生懸命に仲間の中にいる。
T男の経験を整理すると発達の道筋が見えてくる。

幼児は先行経験をベースに経験を積み重ねながら発達することを理解しながらも、手のかかる子として捉えた場合、それのみに目が行き、なぜ今の姿があるのかに思いがいかないことが多い。

T男の事例を通じて
① ゆっくりとしたテンポではあるが、着実に成長、発達している。「先生T男すごいだよ」と友達に認められたT男の経験は、T男の発達にとって大事な経験であった。
② 発達を保障する上は、早急に先を急ぐことはない。幼児にとって今経験していることは必ず次の発達のために必要なことだという「発達し続ける幼児」の存在を信じることである。幼児の今をていねいに踏み固める上、保育者が手を貸してやることはできないだろうか。
③ 幼稚園の生活は、幼児と幼児、幼児と保育者が共に暮らすものである。T男の成長・発達を願うのなら、T男を取り巻く幼児の存在の大ささに気づき、集団が育つことがまたT男を育てることになるという相関関係の中で捉えて行かなければならない。T男の自信は、みんなから温かく見守られているという実感、相互に信頼しあい受け入れられているという感情の安定もある。

この結果、T男の発達を促すための援助を考えた。保育者が行う具体的な援助には二つの方向がある。一つはT男を取り巻く園環境をどのように構成していくかということ（間接援助）と、もう一つは保育者自身がT男にどのようにかかわっていくか（直接援助）ということである。T男自身が求めていることに応えることはもちろんあるが、発達を見通し、発達を促す援助ができよう、予想をたてることも忘れてはならない。

<table>
<thead>
<tr>
<th>T男の発達が促されて行く過程</th>
<th>環 境</th>
<th>保 育 者 の か か わ り</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 新しい環境との出会い</td>
<td>楽しい雰囲気作り</td>
<td>全員が温かい目で見守る。</td>
</tr>
<tr>
<td>不安</td>
<td>不安が和らぎ、安心して過ごせる場や物</td>
<td>声かけを多くする。</td>
</tr>
<tr>
<td>不満</td>
<td>生活の仕方を感じ取り、進めて行くのに必要な物</td>
<td>視覚、聴覚で感じることのできる位置</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>危険に関しては、十分配慮をする。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>手をつないだり、触れたり、安全性をもたけ</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 興味関心をもつ</td>
<td>嬰児、道具等の安全への配慮</td>
<td>遊びに誘う。言葉かけを多くする。</td>
</tr>
<tr>
<td>兄弟や友達を意識する。</td>
<td>遊びの場とよことなる場や材料を揃える。</td>
<td>ほんのささいなことも応える。</td>
</tr>
<tr>
<td>囲生活の流れを意識する</td>
<td>幼児同士つながって遊ぶ</td>
<td>（D君のくつを大事そうにもらっている）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>偶然を生かす。</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 目標感を抱く</td>
<td>水遊び場の準備</td>
<td>遊びのきっかけをつくる。</td>
</tr>
<tr>
<td>したい気持ちが芽生える</td>
<td>水遊び場の準備、配慮</td>
<td>やっていることを認めた、一緒に喜ぶ。</td>
</tr>
<tr>
<td>（場を清潔にする・材料、物の準備）</td>
<td>みんなでやることの楽しさを感じ取れるような遊び</td>
<td>T男の呼びかけを認めた</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>「みてみてね」にしていないにも付き合う。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>トラブルの解消もしかと、かかわり方を支える。</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 意欲をもって取り組む</td>
<td>夏の暑さを感じて遊べるように、木陰など</td>
<td>やろうとしていることを手伝う。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>遊び場を作る</td>
<td>T男に内在しているイメージを受け止</td>
</tr>
</tbody>
</table>

－18－
5. 力の発揮
- 幼児の必要に応じる
- お互いの個性や違いを分かち合えるような遊びの枠組み
- 友達の動きを伝えた共感する
- その場にあったタイミングのよい共感
- すべてだけのたっぷりの時間、空間
- 幼児の変化を支え、一緒に楽しむ
- 幼児ができる喜びを受信
- 友達の中にいることへの幼児自身の喜びの確認と共感
- 丁男の認められるチャンスを生かす
- 友達の中で遊びを守る
- 丁男の相手の動きに合わせた動きを称賛する

6. 新しい力の獲得
- 新しい刺激の得られる目に見える環境
- 場や物の提示をしたり、再構成をする
- 環境に変化を持たせてみる
- 技術的なことへの経験の積み重ねの機会をつくる

7. 生活の広がりと深まり
- 時間のゆとりをもつ
- 豊かに変化して行くことへの共感、励まし
- 次のステップを提示し、共感的に見守る
- 豊かに変化して行くことへの共感、励まし

丁男の発達に応じる生活とは、保育者が丁男をありのままに受け入れ、思いが実現できる生活を共に創っていったことである。丁男が何ができるかはなく、以前に比べどうかという見方で萼締め的に行い、行為や表情等から何を考え、何を表現しようとしているのかおおよそ捉えるようになってきた。人と人との経験の不足を丁男なりに獲得して行く過程において、丁男は伸びやかな発達を示した。そこを基点に他の側面も発達が促され、丁男らしい歩みで園生活を充実して送っている。

丁男の発達を次のように確かめることができた。（おもに人と人との側面から）
VI 研究の成果と課題

1 成果
(1) 抽出児に視点を当て、幼児らしい行動の仕方や考え方、姿について綱縄的に見てきた。そのことから発達の道筋や、必要な経験が捉えられるようになり、一人一人の発達に応じる具体的な言葉かけや見通しを持って待つなどの援助の大切さがわかった。また、そのことは他の幼児についても言えることであり、温かい関心を寄せ、深く見ることの大切さ、一人一人の発達の特性に合わせることの大切さにつながった。
(2) 一人一人の発達を促す援助の工夫の第一歩は、しっかりとした保育の視点であり、保育者の自身の構えであることを再確認した。そのために、絶えず「何が育ったのか」反省評価しながら記録することが大切である。記録は、個々の幼児の姿が見えて楽しいものであると同時に、自分の保育をみつめる厳しいものでもある。幼児の心の働きに応じる記録が必要であることが分かった。
(3) 発達は、幼児が自分の思いを実現したいという内面の目的感に支えられて促されている。保育者は生活の状況を判断し、充実した生活を共に創って行くことが大切であることが分かった。幼児の思いは実現できないこともあるが、失敗は大人の言う失敗ではなく試行錯誤することの価値として捉え、発達に必要な経験として支えることも大切であると捉えた。
(4) 一人一人の幼児の発達は、同年代の幼児や保育者が共に生活することによって促されている部分が多いことが分かった。温かい心のつながりのある集団の中で安心して自己を発揮することが一人一人の発達を促すことになる。保育者役割は、信頼感でむすばれた温かい集団を育てることであり、心の働きを止めることであることを十分認識することができた。

2 今後の課題
(1) 生活の流れに添って一人一人の内面を深く捉える目を養い、翌日に活きる反省・評価の視点を明確にしたい。
(2) 幼稚園教育のねらいでもある心情・意欲・態度については、総合的に育つものであるが、“良く遊んでいるから”とか、“良く活動している”として態度については見落とされている部分があった。今後は“態度”を視野に入れた研究が課題である。
(3) 幼児一人一人の発達を促し、充実した生活のためには保育者間の共通理解が重要になる。保育カンファレンス等、保育者集団として共に高めるための方策を探りたい。

＜主な参考文献＞
文部省 『幼稚園教育指導書増補版』 フレーベル館 1989年
“ 『幼稚園教育指導資料第4集 一人一人に応じる指導』 チャイルド本社 1993年
“ 『幼稚園教育指導資料第4集 幼児理解と評価』 チャイルド本社 1996年
岸井琢磨、小林隆雄、高橋長太郎、新井義 編著 『幼児教育原理の研究』 チャイルド本社 1993年
柴崎正行 『幼児の発達理解と援助』 チャイルド本社 1994年
柴崎正行 編著 『保育方法の探求』 建帛社 1995年